

私はこう 考える

「親支援」とは言うけれど

親支援とは

佐藤恵美子

はじめに

筆者は学生時代から、障害をもつ子どもの療育や親の相談にかかわってきましたが、障害の有無にかかわらず、子育てをする家族のさまざまな悩みや問題に関心をもつようになりました。そして子どもの発達に限らず、より広く心の問題にかかわるために、臨床心理士の資格を得た経緯があります。

親自身がしっかり抱えられ安定すると、ゆったりと広い目で子どもをとらえることができるようになります。必ずや子どもにも成長・変化が見られるものです。子どもを一番よく知り、本当に子どもに良いことができるのは親なのです。その親が不安定な時に

寄り添い、支えることが親支援といえるでしょう。

親の気持ちに寄り添う養育支援へ

子育て不安の多くは、ごく普通の健診や気軽な相談の場、親子教室などで対応することで軽減できます。健診後のフォローとしての親子教室に参加した親の感想から、話を聴いてもらった、育児について学べた、親子とも楽しめた、母同士で話ができた、リフレッシュできた、という効果が確認できました。親を支援するということは、①親自身の心に寄り添い、子育てのよりどころになること、そして②安定した親が子どもの心に寄り添い、子どもの力を伸ばせるように見守り助言すること、といえるでしょう。



親自身の心に寄り添うには、前提として、親の気持ちの理解が必要です。精神保健の領域では、親は子どもを産み育てる時に自分と親との関係が無意識によりがえり、いろいろな思いに触れることが多いといわれます。さらに、女性はそれまでの自分の生活が一変するため、孤独感や疎外感もち、自信を失いがちです。そこに子どもの発達のことなどに触れられればどれだけ心が揺れるか知った上で、その揺れに寄り添うことが支援の第一歩といえるでしょう。

母子保健の領域では、周産期からさまざまな形で子育て支援、発達支援に向けた事業が展開され、療育の場でも保護者支援に熱心な取り組みがなされてきています。この四半世紀で女性の生き方が大きく変わってきている現代、母性神話に甘んじているわけにはいかなくなりました。医療の進歩に伴い特別な配慮の要る妊娠・出産が増え、家族の形態も多様化し、より現状に即した研究が求められています。

保育の場での課題

(この項では親を保護者に置き換えて呼ぶことにします。)

保育の場で困難を感じる保護者対応はどんなことなのだろうかとアンケートをとってみたことがあります。すると、発達が気になる子どもの保護者に見られることとして、子どものことを話そうとすると避ける、家では困っていないからと保育士の見解を否定する、子どもの様子が気になってはいるものの療育に関する話題には拒否的な態度をとる、ということが挙げられました。

子どもの発達支援を進めるためには保護者と共通理解をもつことが必要という考えから、保育の場では、保護者の知らない保育集団での子どもの様子を保護者に伝えようという姿勢が強いのです。発達の問題が主ではない場合も、生活習慣や友達関係などについて、その子どもの成長を願い、保護者に助言をしたいと思う保育士が多いようです。

保護者対応に配慮すべき点の一つ目は、「保護者の

「気持ちの理解」です。子どもの状態、特に発達について保護者に伝えよう伝えようという気持ちですが、保護者との関係に壁をつくっていったようです。伝えるのは何のためなのかを問い直すと、保育士が専門機関の助言を仰ぐため、あるいは加配要員をつけてもらうため、そして保護者に就学後のことを意識してもらうため、ということが主な理由でした。

子どもの発達についての話に防衛的・拒否的に見える保護者の気持ちはどう理解したらよいのでしょうか？ 発達に関して防衛的・拒否的に見える言動の裏に潜む心理を知るために、これまでの相談事例をタイプに分類してみました。大きく分けると、養育力の点で余裕のない親なり家庭環境の場合、育児負担が大きいことをわかってほしい思いが強い場合、そして発達が気になるものさまざまな背景（その親自身の育ちや現在の家族や身内との関係）があり障碍ということに葛藤の大きい場合、などが見られました。保護者の不安な心境やさまざまな事情が見えてくると、保護者への否定的な印象

が薄れ、一人の子どもの成長を願い、互いに協働する関係ができて始めるといことなのでしよう。保護者の態度の変容が見られたという報告がありました。

保護者対応に配慮すべき点の二つ目は、「子どもの発達のとらえ方」です。子どもの発達というのは、①周産期に始まりさまざまな環境的要因の影響が大きいいため、診断には注意が必要なこと、②日々変化するもので、その発達過程では確定的なことは言えないこと、そして③一刻も早く療育専門機関につなげて治療する必要がある、あるいは、すればよい、というものではないこと、を心にとどめておきたいものです。ゆっくり親の気持ちと共に揺れながら、ただしその時できることは保育士として自信をもってしっかり行い、発達を見守ることが大切です。

発達が気になる子どもの場合でも行動面が気になる子どもの場合でも、保育士と保護者が子どものために協働するためには信頼関係が前提で、信頼関係が成立する前の助言は時に害となることもあるのです。

信頼関係

信頼関係をつくるためにまずは傾聴することが大切だとよくいわれます。ここでいう傾聴とは、相手のすべてを受け入れ、話した内容よりも感情に共感的に聴くことといえます。うなずいたり、相づちを打つ、「……そうなんだあ」「……大変だったのねえ」と言葉を繰り返したり言い換えたりしながら聴くことで語りを促すことができます。それは困ると思うような発言に対しても、真つ向から否定はせず、まづは受けとめて、なぜそのようなことを言うのか気持ちや聴こうとすると、そこから気持ちやほぐれて徐々に本音が聞けることになるものなのです。

どうも話がかみ合わない、自分勝手と見える言動が見られるなど、傾聴を心掛けてもうまくいかないという訴えもよく聞きます。その中には精神疾患や人格的な問題をもつ人も多く、保育者の側が疲弊し傷ついてしまうことがあります。現場ではこのような保護者対応に苦慮することが多いため勉強会など

で対応していますが、この場ではここまでにします。

子育てはなかなか評価されないものとしてよくいわれますが、勉強に仕事にと努力をしてそれなりに評価を得てきた親たちが、子育てで自信をなくすことがよくあります。親たちも受けとめられ、自信を取り戻し、子どもを客観的に見る冷静さをもてるようになるれば、保育者との協働も可能になります。

おわりに

保育者たちに親支援についての話をすると、必ずどこかで「でも、私たちは子どもを守るのが仕事」という声が聞こえます。子育て支援政策が進み、親の負担や不安軽減がうたわれる昨今、私はやはり親は子どものために譲らなければならないこともあるのではないかとこの見解ももちます。親に子どもを守る余裕をもってもらうために親支援をしています。が、取り立てて親支援と言わずとも子育てがしやすい社会が理想といえるでしょうか。まだまだ取り組みは続きます。

(臨床心理士)